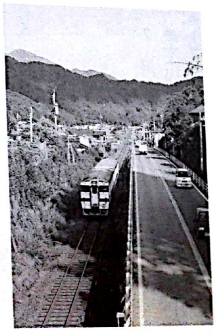
笹木小学校と周辺の集落

が架かり、JR線の鉄橋の下に町切井堰がある。町切橋はこの橋が架かる以前は現在よりやや下流に架かっていたが、三回目の橋の架け替えにより現在の橋となった。平成一七年には幅員を拡げて歩道が設けられた。

浪瀬川が当地内で国道を横断し、厳木川に合流しており、国道に大橋が架かる。この川の田原一番地にかつては区有の水車（トンボ）が設置され、米麦を搗くために利用された。笹木小学校裏の厳木川に井堰があり、岩屋地区の用水のための井堰なので「岩屋井堰」という。この井堰の上流に「中ノ瀬」と称する瀬があり、立切網で鮎などが獲れていた。犬ノ谷川は岩屋との境を流れ厳木川に合流する。かつての旧国道に石組みの「いんのたにはし」が架かっていたが、現在は暗渠になっている。

昭和二八年の大水害では、笹木炭坑に水が入り炭坑員一名が犠牲になっている。



JRと国道203号線

3　道

笹木は佐賀と唐津を結ぶ佐賀街道沿いの集落であり、集落内を多くの旅人が往来した。明治二一年佐賀街道が車両通行可能に改修されたとき、町切に渡る橋が架けられ、町切地区の丘陵は削り取られて岩屋・本山への道筋が大きく変わった。

国道二〇三号線が地区の北部を通る。これは昭和八年に現在の路線となったもので、江戸期の佐賀街道（後の県道）の一部が笹木小学校前にわずかに残っている。この道の両端を鉄道が遮断し、二か所に踏切が生じたので、交通安全のために現在のように直線化された。現在は国道と鉄道を跨ぐ跨線橋が架けられている。

旧佐賀街道は岩屋から厳木川沿いに笹木に入り、小学校前を経て大橋を通り、厳木高校の裏を通って厳木に通じていた。明治一六年頃の道幅は九尺（二・九〇㍍）で荷車が行合う事が出来た。現在は通学路に利用されている。

大橋から県道畑河内厳木線（通称浪瀬道）が南に通じていた。平成四年一月、厳木多久自動車道路の開通に伴い、現大橋交差点より北西約二〇〇㍍の地点（字田原）に進入口を設け、同八年に完成した。「笹木交差点」と称している。このため民家の八軒が立ち退いた。

平成一六年一一月から、天川からの乗合タクシー朝便が浪瀬への旧道を往復し、地区内を通り、岩屋のQショップを経て本山保育園迄を往復する。

昼便は天川発で、まっすぐ本山の佐賀銀行前までで（乗降自由でどこでも停車する）朝・昼の二往復である。三便目は天川を夕方五時半に発ち、厳木駅迄で学生たちの利便が図られている。厳木町の補助による山間地域生活路線タクシーである。

犬の谷から浪瀬の日東工業KK附近に通じる道がある。平成一四年一二月一五日厳木多久自動車道路が岩屋まで開通したので、区内を通過する車両がいくらかは減っている。国道二〇三号線から浪瀬道へ入ると、この道への出入りが出来る。

江戸時代、田原にあった庄屋家（現田代正輝宅横の空き地）が村の元標とされていた。

4　耕　地

町内では面積が一番小さな大字で、勿論耕地も狭い。一六一六年以前の古高では二九石九斗二升五合、『天保郷帳』では四八石七升七合とあり、文化年中の記録では二町七反一畝一五歩とある。

明治一六年の『東松浦郡村誌』では江戸期の税地は田三町四反七畝二三歩、畑四反八畝二二歩、合計三町九反六畝一五歩で、明治初年には田が六町三反二畝二歩、畑一町七反八畝一四歩、宅地六反七畝六歩、合計八町七反七畝二二歩と格段に増加している。

四、沿　革

1　政治・行政

笹木は藩政初期から村として存在している。松浦源氏の志佐氏の分脈がこの地に居住し、慶長九年（一六〇四）庄屋に任ぜられている。以来志佐氏は永代庄屋として庄屋職を継承して、明治初年庄屋制が廃止に至るまでに及んだ。